九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 李雲翔の南京秦淮における交友と編著活動

岩崎，華奈子
九州大学大学院人文科学府 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1498250

出版情報：中国文学論集. 43, pp.165-174, 2014-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

# 李雲翔の南京秦淮における交友と編著活動

岩崎華奈子

## 一　はじめに

明末の通俗小説『封神演義』の版本のうち、蘇州の書坊舒載陽が刊刻した通称舒載陽本[1]は現存最古の明刊本であり、巻頭には李雲翔という人物による序文が掲載されている。この序は『封神演義』の出版経緯を叙述しており[2]、章培恒氏がこれに詳細な考察を加えて、李雲翔を主要な作者とする説を提示した[3]。その後も序文の解釈をめぐって様々な議論が展開されたが[4]、序文の著者である李雲翔自身に対する考察は従来ほとんど行われていない。序文著者の研究は、序文の叙述内容を検討するにあたり必須の基礎作業である。しかし李雲翔に関する記録は史書になく、調査が容易でないため、これまでは『封神演義』序の末尾にある「邗江李雲翔爲霖甫撰」という署名から、揚州の人、字は為霖、という断片情報が得られるのみであった。

近年、周明初氏により、李雲翔の事績や交友関係が明らかにされ、また『封神演義』舒載陽本の成立時期や作者問題に対し新たな見解が示された[5]。本稿では、主に李雲翔の人的交流および編著活動の拠点が南京秦淮であることに着目し、彼が『封神演義』舒載陽本の成立に携わった背景を検討する。

## 二　周明初氏による先行研究について

まず李雲翔の事績に関する周明初氏の先行研究について簡単に紹介したい。周氏論文は李雲翔の事績を列挙し、彼と『封神演義』の関係について考察する。前半部分では李雲翔が関与した書籍に見える序跋・凡例・附言および出版事項等の資料を基に、李雲翔の活動と交友を編年する。以下にその要点をまとめる。

**1．万暦四十六（一六一八）年秋、郷試に落第。馮夢龍と秦淮の妓楼にて宴遊し、『金陵百媚』[6]を編纂する。**

『金陵百媚』は、科挙の殿試になぞらえて妓女を順位付けした、いわゆる花案・花榜と呼ばれるもので[7]、該書は南京秦淮の妓女の品評、および彼女たちを詠じた詩・詞・散曲・俗謡等を収録している。巻頭に「廣陵爲霖子（李雲翔）著品 呉中龍子猶（馮夢龍）批閲」とあり、馮夢龍の跋文と評語が附されていることから、『金陵百媚』李雲翔序に見える、李雲翔を秦淮の妓楼に誘い該書の編纂を奨励した「呉中友人」とは、すなわち馮夢龍を指すと考えられる。また同序に見える該書の刊刻を求めた「葉君」とは、凡例や識語を書いた蘇州の書坊主葉一夔である。

**2．天啓五（一六二五）年、湖北に遊学し、麻城の李長庚に師事する。**

崇禎六（一六三三）年序刊の『彙輯輿図備攷全書』[8]（以下『輿図備攷』と略称）李長庚序に記述がある。李長庚は麻城（現湖北省）の人で、万暦二十三（一五九五）年の進士。『明史』巻二五六に伝がある。

**3．天啓六（一六二六）年夏、秦淮に遊び『新鐫六院女史清流北調詞曲』[9]（以下『北調詞曲』と略称）を編纂する。**

『北調詞曲』は『金陵百媚』と同様、秦淮の妓女を品評した花案。この李雲翔序に「同社友程・唐諸君、偕二三麗人、泛水秦淮（社友の程・唐諸君と同に、二三の麗人を偕い、秦淮に泛水す）」とある。また同序および出版者龐雲衢の附言によれば、李雲翔には『金陵百媚』の他に『十醜十俊』『名姝詞曲』という既刊書があり、評判を博していたことがわかる。これら二書は現存しないが、内容はその書名から花案と推測される。

**4．天啓七（一六二七）年、南京の文人結社に参加し、『新鐫諸子抜萃』[10]（以下『諸子抜萃』と略称）を選評する。**

『諸子抜萃』には李雲翔序の他に于仕廉による序文がある。于仕廉は金壇（現江蘇省）の人で、万暦十四（一五八六）年の進士。于序には「余門人李生」とあり、于仕廉と李雲翔とが師弟関係にあったことがわかる。また参閲者

として唐捷元・唐光夔・盛于斯・曹大階といった名が見え、彼らは皆「社友」と称している。『北調詞曲』李雲翔序に見える「社友程・唐諸君」の「唐」とは、この唐捷元・唐光夔を指す可能性がある。この文人結社および社中の人物については詳細不明であるが、盛于斯のみ周亮工による伝記「盛此公伝」[11]が残っている。

**5．崇禎三（一六三〇）年、南京に寓居し『輿図備攷』の参訂を開始、崇禎六（一六三三）年冬に完成させる。**

『輿図備攷』の李雲翔序に「是書越三寒暑、五脱稿、茲冬月之初、始告厥成（是の書 三寒暑を越し、五たび脱稿し、茲の冬月の初、始めて厥の成を告ぐ）」とあり、末尾に「癸酉（崇禎六年）冬之十日」の署名があることから、李雲翔は崇禎三年から崇禎六年の間、『輿図備攷』の参訂に従事していたとわかる。

続く後半部分では『封神演義』の成書時期や作者問題について、前半部分で示した李雲翔の事績と関連づけて考証する。詳細は割愛するが、結論は次の三点である。

**①李雲翔の『封神演義』に関する作業期間を、崇禎元年から崇禎三年の間とする。『封神演義』批評者として仮託された鍾惺の没年（天啓五年）以降、かつ李雲翔が他の編著作業を行っていない時期であることを理由に挙げる。**

**②『輿図備攷』や『諸子抜萃』といった他者の著作の参訂・節略を主とする李雲翔の作業内容に鑑み、李雲翔を『封神演義』の主要な作者とする説を否定する。**

**③『封神演義』作者説のある「陸長庚」[12]は、李雲翔の師「李長庚」である可能性を提示する。**

周氏は李雲翔の事績の列挙と編年により、李雲翔が『封神演義』舒載陽本に関与した時期や程度について新たな見解を示した。但し、李長庚を除けば、李雲翔の人的交流や活動地域については資料の提示に止まる。本稿は以下、李雲翔と交流のあった人物や活動拠点を中心に再検討し、これらと『封神演義』成立との関係について考証する。

## 三　李雲翔の人的交流と編著活動の拠点

上述のとおり、周氏論文では『北調詞曲』の李雲翔序に見える「社友程・唐諸君」の「唐」氏について、『諸子抜萃』の参閲者唐捷元・唐光夔であると推測する。また『諸子抜萃』の参閲者盛于斯に関する資料として、周亮工「盛

此公伝」を挙げる。まずはこれらの人物について資料を補い、その上で李雲翔の活動との関連を考察したい。

まず「社友程・唐諸君」の「唐」について、『**新鐫広輯海内名家工画能書**』[13]（以下『工画能書』と略称）を挙げるべきであろう。該書は日本に写本が残るのみで刊行年は不明だが、巻頭に参訂者として李雲翔、校閲者として唐捷元・唐光夔の名がある[14]。両唐氏と李雲翔が共同で編著活動を行っていた証拠として、周氏の説を補強し得るものである[15]。また盛于斯については、周亮工「盛此公伝」によれば、字は此公、南陵（現安徽省）の人で、南京に赴き、混迷する世の中に慷慨し、士人から身分の低い者に至るまで幅広く「散金結客」したが、後に詐欺にあって財産を失い、失意して郷里に帰ったという[16]。盛于斯が南京で「散金結客」した面々の中には、「社友」たる李雲翔もいたに違いない。この伝記のほかにも、祁彪佳『遠山堂曲品』に盛于斯の戯曲「鳴冤記」についての記録がある。戯曲は既に散佚しているが、その内容は天啓年間に魏忠賢を弾劾し、解職された胡永順という人物を生としたものであったらしい[17]。周明初氏は言及していないが、盛于斯は『諸子抜萃』の参閲者であるだけでなく、『北調詞曲』の批閲者でもある[18]。『北調詞曲』は、『金陵百媚』の曲調が南調であるのに対して北調を用いた点に特徴があり[19]、李雲翔は南北両調を自在に作詞できたようである。李雲翔と盛于斯はいずれも詞曲に精通した人物であったと言えよう[20]。

李雲翔と交友があった人物の中で最も重要なのが、蘇州の馮夢龍である。彼は李雲翔を秦淮の妓楼に誘い、花案を作るよう勧め、跋文と批評を寄せた。大木康氏は『金陵百媚』の出版者である葉一夔と李雲翔を結びつけたのも馮夢龍であろうと推測し、彼を『金陵百媚』の「プロモーター」（興行主）と称している[21]。馮夢龍の編纂した俗謡集『掛枝児』『山歌』に妓楼で聞き覚えた歌謡や宴席での戯作が多く含まれている点も併せれば[22]、妓女品評に詩詞のみならず多数の散曲や俗謡を附す『金陵百媚』は、馮夢龍の影響を強く受けて成立したものと考えられる。

以上、李雲翔の編著作品に関与した人物について、管見の限りの資料に基づき考察を試みた。ここで注目すべきは、李雲翔の人的交流および編著活動の舞台が南京、中でも秦淮を中心とする点である。李雲翔は李長庚に師事した時期を除き、常に南京に在った。特に万暦四十六（一六一八）～天啓六（一六二六）年という李雲翔の編著活動初期の作品は秦淮の妓女を品評した花案であるから、その活動拠点は当然秦淮の妓楼となる。秦淮妓楼の中心である旧院は、明太祖が設置した富楽院を基とし、郷試が開催される江南貢院と秦淮河を挟んで対峙していた。すなわ

ち秦淮は単なる色街ではなく、江南の文人学士が集結する社交場でもあったのである。そこで開かれる宴席が詞曲競作の場となることもあった[23]。秦淮は、李雲翔が得意の詞曲創作の腕前を披露して名を挙げ、交際範囲を拡大するに最適の場所であったと言える。盛于斯が「散金結客」した場も、秦淮を措いてほかに無いであろう。盛于斯は秦淮の妓女に詳しく、かつ詞曲に通じていたからこそ『北調詞曲』の批閲が可能だったのである。李雲翔は後にこの『北調詞曲』に関わった唐捷元・唐光夔・盛于斯と共に結社し、『諸子抜萃』を編纂した。このように、李雲翔はまず秦淮にて人脈を築き、それによって編著活動の契機を掴み、花案から様々なジャンルの作品へと活動の幅を広げていったのではないか。『輿図備攷』李雲翔序の末尾に「於秦淮之兩娛軒中」と署名されている点から、花案以外の作品についても、秦淮の妓楼が執筆の現場となっていたことがわかる。つまり、李雲翔は人的交流の展開や編著活動の機会の獲得、更に実際の執筆に至るまで、秦淮の妓楼を活動の拠点としていたのである。ひいては彼が『封神演義』の編著作業を実施した場も、南京秦淮であった可能性が高い[24]。『封神演義』舒載陽本の出版地は蘇州であるが、この点は『金陵百媚』と同様である。後者の場合、南京秦淮で作成された李雲翔の花案が蘇州の馮夢龍に送られ、彼の批閲を経た後、そのまま蘇州において葉一夔により刊刻されたのであろう。想像を逞しくすれば、馮夢龍の参画を得た『金陵百媚』によって、蘇州の書坊葉氏との関係構築、および蘇州における文名の獲得を果たし、これを契機として他の蘇州の書坊主とも交流するようになり、『封神演義』の出版者舒載陽と関係を結ぶに至ったのではないだろうか。

## 四　おわりに

明代末期には馮夢龍に代表される如く、生員や童生の身分で著述を生業とした者が多数存在した[25]。李雲翔もまた郷試に落第し、書坊の注文に応じて編著作業に従事した、いわゆる著述業者の一員であった。彼は南京秦淮の妓楼を拠点として唐光夔・唐捷元・盛于斯そして馮夢龍と交流し、編著活動を展開した。『封神演義』の編纂に関与した契機も、南京秦淮において育んだ人脈と実績により獲得したものと考えられる。或いは馮夢龍その人が、間接的で

はあるが、李雲翔と蘇州の書坊主舒載陽の仲介人であった可能性もある。

『封神演義』の作者或いは評者と目される李雲翔の如上の特徴に鑑み、改めて『封神演義』序文や本文・評点を分析することで、作者問題を含む『封神演義』の成立過程の解明に繋がるのではないだろうか。それは明末の通俗小説の成立の実態、すなわち小説がいかなる人々の手で、いかにして完成され、出版されていたかを示す一例となろう。周明初氏による李雲翔の事績の編年、そして本稿が明らかにした南京秦淮を拠点とする李雲翔の交友と編著活動の実態は、それらの研究の基礎となるものである。

## 注

（1）『新刻鍾伯敬先生批評封神演義』二十巻、内閣文庫蔵。該本の巻二巻頭にのみ「鍾山逸叟許仲琳編輯　金閶載陽舒文淵梓行」とある。許仲琳については委細不詳。眉批・圏点・回末評が附され、これらは一般に序文を著した李雲翔の手になるものと考えられている（譚帆『中国小説批評研究』、華東師範大学出版社、二〇〇一年等）。李雲翔序には、彼に作業を依託した「舒冲甫」という人物が見え、また封面にも「金閶書坊舒冲甫」による識語があるが、この「舒冲甫」が巻二巻頭の「舒載陽」と同一人物であるかは不明。舒載陽については杜信孚・杜同書『全明分省分県刻書考』（線装書局、二〇〇一年）江蘇書林巻に「舒載陽、字文淵、蘇州人」とあり、『封神演義』の他、万暦泰昌年間刊刻の書籍二種が記録されている。

（2）「俗有姜子牙斬將封神之説、從未有繕本、不過傳聞於説詞者之口。……余友舒冲甫、自楚中重資搆〔購〕有鍾伯敬先生批閲『封神』一册、尚未竟其業、乃托余終其事。余不愧續貂、刪其荒謬、去其鄙俚、而於每回之後、或正詞〔辭〕、或反説、或以嘲謔之語、以寫其忠貞俠烈之品、奸邪頑頓之態（俗に姜子牙斬将封神の説有れど、従て未だ繕本有らず、説詞者の口より伝え聞くに過ぎず。……余が友舒冲甫、楚中より資を重ねて購う鍾伯敬先生批閲の『封神』一册、尚お未だ其の業を竟えざる有り、乃ち余に其の事を終えんことを托す。余 続貂を愧じず、其の荒謬なるを刪し、其の鄙俚たるを去り、而して毎回の後に、或いは正辞、或いは反説、或いは嘲謔の語を以てし、以て其の忠貞俠烈の品、奸

邪頑頓の態を写す）」とある。

（3）章培恒「『封神演義』的性質・時代和作者」（『献疑集』、岳麓書社、一九九三年所収。初出は『新整理本封神演義』「前言」、江蘇古籍出版社、一九九一年）。

（4）近年では大塚秀高「六続研究前後――『封神演義』と『前漢書平話』をめぐって――」（『中国古典小説研究』第八号、中国古典小説研究会、二〇〇三年）、李亦輝「従詞話本到刊本――論『封神演義』的成書・版本及編者問題」（『蘇州大学学報（哲学社会科学版）』、蘇州大学、二〇一二年第五期）等がある。

（5）周明初「李雲翔生平事迹輯考及『封神演義』諸問題的新認識」（『明代文学学会（籌）第九届年会暨二〇一三年明代文学国際学術研討会論文集（小説・戯曲巻）』）。

（6）二巻図一巻、内閣文庫蔵。万暦四十六（一六一八）年の李雲翔序があり、「萃奇館主人葉一夔」の凡例、二十五面の図像が続く。その第一面は「百花主人紫薇郎品花圖」と題し、「座師」たる「百花主人」すなわち李雲翔の像が描かれる。図像の版心下には「萃奇館藏板」とある。萃奇館は蘇州の書坊で、他に『秦淮四美人詩』四巻を刊行している（『全明分省分県刻書考』江蘇書林巻）。また封面には「閶門錢益吾梓行」とある。該書については合山究「花案・花榜考」（『明清時代の女性と文学』、汲古書院、二〇〇六年所収。初出は『文学論輯』第三十五号、九州大学教養部文学研究会、一九八九年）、大木康『中国遊里空間 明清秦淮妓女の世界』第八章（青土社、二〇〇一年）、および大木康『馮夢龍『山歌』の研究 中国明代の通俗歌謡』第二章第五節（勁草書房、二〇〇三年）に言及がある。

（7）花案・花榜については注（6）合山氏論文を参照。

（8）十八巻。内閣文庫や南京大学等に崇禎六（一六三三）年序刊本を所蔵するほか、北京師範大学図書館蔵の順治七（一六五〇）年重刻本が『四庫禁燬書叢刊』史部第二十一・二十二冊に収録される。巻頭に「關中潘光祖海虞父彙輯 邗江李雲翔爲霖父參訂 繡谷傅昌辰少山父較梓」とあり、明刊本の版心下には傅昌辰の書坊名「版築居」の三字が見える（順治重刻本では削去）。従来の様々な地理書を集成したもので、各省の沿革・地理・特産・人物等を記し、巻頭にはマテオ・リッチ系世界図を掲載する。大澤顯浩「『肇域志』の成立――明末経世学の一側面――」（『東洋史研究』五十巻四号、京都大学東洋史研究会、一九九二年）、姜瑞珍・劉樹偉「『彙輯輿図備考全書』版本研究」（『山東図書館学刊』、

山東図書館学会、二〇〇九年第四期）参照。

（9）四巻、天理大学附属天理図書館蔵。巻頭に「廣陵爲霖子著品　春穀方圖甫批閲」、封面に「龍光堂廬雲衢梓行」とあり、天啓六（一六二六）年の李雲翔序、廬雲衢の附言・凡例・徵文啓を有する。周明初・彭志「日本所蔵稀見明詞輯補（一）」（『閲江学刊』、南京信息工程大学、二〇一三年第三期）に、該書の一部が翻刻される。

（10）八巻、首都図書館・中国科学院図書館等蔵。筆者未見。『四庫全書総目提要』巻一三二　子部四十二　雑家類存目に記録があり、天啓七（一六二七）年の成立であること、また諸子の語を彙輯した帰有光『諸子彙函』の節略本であることが記述されている。杜沢遜『四庫存目標注』（上海古籍出版社、二〇〇七年）によれば、巻頭に「明邗江李雲翔爲霖甫評選　秣稜社友唐捷元垣之甫參閲　余大茂思泉甫較梓」とあり、また注（5）周氏論文によれば、巻二には「秣陵社友唐光夔冠甫參閲」、巻六には「春谷社友盛于斯方圓（ママ）甫參閲」「江都社友曹大階昇之甫較梓」とあるという。

（11）周亮工『賴古堂集』巻十八（『続修四庫全書』集部第一四〇〇冊）および張潮『虞初新志』巻一所収。

（12）『伝奇彙考』巻七「順天時」条に「按『封神傳』係元時道士陸長庚所作、未知的否（按ずるに『封神伝』は係（こ）れ元時の道士　陸長庚の作る所なれど、未だ的否を知らず）」とある。張政烺氏は、「元時」は「明時」の誤りで、「陸長庚」とは明の嘉靖万暦年間の道士陸西星（字長庚）であり、彼こそが『封神演義』の作者である、とする説を唱えた（張政烺・胡適「『封神演義』的作者」、『独立評論』第二〇九期、一九三六年）。

（13）三巻。国立国会図書館と京都府立総合資料館に写本が残る。巻頭には「古呉張鳳翼伯起氏編輯　古揚李雲翔爲霖氏參訂　金陵唐捷元恒（ママ）之氏／先夔冠甫氏校閲　金陵余大茂思泉氏」とある。書名に「新鐫」と冠している点から元は刊本であったと考えられるが、原刊本は現存せず、封面や序文等も写本中には無い。書画に関する諸家の言説の集成で、巻一・二が画について、巻三が書についての叙述である。巻二末尾に図像十九面を有し、巻一「論原始」、巻三「論淵源」は「爲霖子曰」で始まり、それぞれ画史・書史について述べる。なお『四庫全書総目提要』巻一一四　子部二十四　芸術類存目に、張鳳翼撰『海内名家工画能事』の条がある。提要によれば該書は二巻本で、「是編採輯前人論畫緒言（是の編　前人の画を論ずる緒言を採輯す）」、すなわち画についてのみ叙述したものであるから、李雲翔参訂の『工画能書』とは異本と考えられる。『工画能書』は『海内名家工画能事』に、書に関する一巻を加えたものかもしれない。

（14）　但し、国会図書館蔵本・京都府立総合資料館蔵本のいずれも唐光夔を「先夔」に作る（注（13）参照）。

（15）　なお唐捷元・唐光夔が関与した書籍として、『鍾伯敬先生硃評詞府霊蛇』四巻（国家図書館蔵）、『鍾伯敬先生硃評詞府霊蛇二集』四巻（台湾国立中央図書館蔵）の二種が現存する。張健『元代詩法校考』「附録四　元代詩法著作版本考述」（北京大学出版社、二〇〇一年）、孫小力『明代詩学書目彙考』（蒋寅・張伯偉主編『中国詩学』第九輯、人民文学出版社、二〇〇四年）、呉嘉慧「『鍾伯敬硃評詞府霊蛇二集』弁訛」（『東方人文学誌』第九巻第四期、文津出版社、二〇一〇年）参照。加えて、この二書の校訂は程雲従、出版は唐建元という人物が担っている。まず唐建元については『諸子抜萃』李雲翔序に該書の刊行を推奨した人物として名前が挙げられており（注（10）杜沢遜『四庫存目標注』参照）、彼もまた李雲翔の編著活動と関わりの深い人物とわかる。程雲従については唐捷元・唐光夔と関係があった点に鑑みれば、確証はないが『北調詞曲』李雲翔序にいう「唐」と共に李雲翔を歓待した「程」氏その人であるかもしれない。当該二書に李雲翔の関与は認められないが、彼と近しい人物の活動を示す資料である。

（16）　「去而之秣陵、欲盡交東南士、東南士亦願交此公。此公以爲、世且亂、吾當見天子、慷慨言當世事、彼經生何足語、會求其人於屠狗間。於是益散金結客、遂爲廣陵兒所詒。……金垂盡、嗒然與世無所合、退而返里閈（去りて秣陵に之き、尽く東南の士と交わらんと欲し、東南の士も亦た此公と交わらんことを願う。此公以為らく、世且に乱れんとす、吾当に天子に見え、慷慨して当世の事を言うべきも、彼の経生何ぞ語るに足りん、会ず其の人を屠狗の間に求めん、と。是に於て益ます散金結客し、遂に広陵児の詒く所と為る。……金尽くるに垂んとし、嗒然として世と合う所無く、退きて里閈に返る）」とある。

（17）　『遠山堂曲品』には「此記魏璫、而以胡給諫天岳爲生者（此れ魏璫を記し、胡給諫天岳（胡永順）を以て生と為す者なり）」とある（中国戯曲研究院編『中国古典戯曲論著集』六、中国戯劇出版社、一九五九年所収）。また斉森華・陳多・葉長海主編『中国曲学大辞典』（浙江教育出版社、一九九七年）三八八頁「鳴冤記」条参照。なお大木康『明末江南の出版文化』（研文出版、二〇〇四年）によれば、魏忠賢を題材とした白話小説が、崇禎帝即位による魏忠賢失脚の直後から多数出版されたという。「鳴冤記」も同種の作品であろう。

（18）　『諸子抜萃』に見える盛于斯の字「方圓」（注（10）参照）は、『北調詞曲』の批閲者「春穀方圖甫」（注（9）参照）

の「方圖」と字形が近く、本貫も共に「春穀（春谷）」である。春穀は現安徽省南陵県を含む地域の古名。周亮工「盛此公伝」の「南陵人」という記述とも符合するため、両者は同一人物と判断した。

(19)『北調詞曲』李雲翔序に、龐雲衢の「君何不以諸妓之才之色、譜爲北調、竝前刻、不南北兩擅其美（君何ぞ諸妓の才の色を以て、譜して北調を為さず、前刻と並べて、南北 両つながら其の美を擅（ほしいまま）にせざるや）」という発言が記載されている。龐雲衢の附言にも同様の記述がある。

(20) 盛于斯の著作はこのほか『休庵集』二巻、『休庵影語』二巻がある。前者は国家図書館に周亮工刻本が所蔵され、また徐乃昌輯『南陵先哲遺書』に影印が収録される。後者は点校本（開明書店、一九三一年出版）が出版されており、『水滸伝』や『西遊記』に独自の研究を加えたり、名家に仮託した書籍の横行を厳しく批判する文章がある（「総批水滸伝」「西遊記誤」）。当時の通俗書出版や小説読書の実態が窺われ興味深い。

(21) 注（6）大木氏『中国遊里空間 明清秦淮妓女の世界』二三八頁に「この書物の刊行者は葉一夔であるが、馮夢龍はその書物の多くを蘇州の葉姓の出版社から出しており、彼らと特別の関係があったようである。ここでもおそらく馮夢龍がその出版の仲介をしたのであろう」とある。

(22) 注（6）大木氏『馮夢龍『山歌』の研究 中国明代の通俗歌謡』終章「編者馮夢龍と『山歌』の文学」参照。なお馮夢龍『掛枝児』『山歌』の出版時期は万暦三十九（一六一一）～四十一年（一六一三）と推測され（同書同章）、李雲翔『金陵百媚』の編纂時期と極めて近い。また馮夢龍はほかにも宛瑜子『呉姫百媚』（万暦四十五（一六一七）年序）という花案の出版にも関与しており、『金陵百媚』『呉姫百媚』には『山歌』と共通する呉歌が収録される。

(23) 注（6）大木氏両著書参照。

(24) 舒載陽本巻二巻頭にて編輯者許仲琳が「鍾山逸叟」と称し、南京人と考えられる点も、小説『封神演義』と南京という土地とが無関係ではないことを示しているように思われる。

(25) 非士大夫の著述業者の活躍については、井上進『中国出版文化史――書物世界と知の風景――』第十八章（名古屋大学出版会、二〇〇二年）に多数の例示と論考がある。